

<翻訳>

李泰鎮「吉田松陰と徳富蘇峰」
— 近代日本による韓国侵略の思想的基底 —

**Yi Tae-jin, “Yoshida Shoin and Tokutomi Soho”:
Modern Japanese Foundation of Ideas on the Conquering
Korea and Others in Asia**

邊 英浩 小宮 秀陵 [共訳]

BYEON Yeong-ho, KOMIYA Hidetaka

訳者解題

本稿は李泰鎮（イ・テジン ソウル大学名誉教授）が「韓日両国知識人共同声明記念第3次学術会議」（2014年1月27日）で行った報告を論文としたものである。直前に安倍首相が靖国神社を参拝し、韓国と中国、米国などからの批判をよびおこしていたが、靖国参拝の思想的背景の解明が必要とされていた。思想的源流はまず征韓論にあることは周知の通りであるが、被害当事国である韓国では、征韓論に対する研究は意外なほど少なく、本論文はその研究上の空白を埋めるものである。本論文では、韓国併合にいたる過程は、通説的な理解である近代的な帝国主義による膨張ではなく、吉田松陰が唱えた封建的な膨張主義である征韓論が実現していく過程であり、実際にも松陰の門下生たちがその後韓国併合をなしとげていったことが明かにされている。また併合過程で言論機関の統制を担ったのが徳富蘇峰であったが、徳富も吉田松陰の信奉者であり、徳富が吉田松陰のイメージをつくりあげていくうえで大きな役割を果たしたことも明かにされている。本論文が、現在悪化している日韓関係を巨視的にみていくにおいてもつ意義は決して小さくはない。

日本語への翻訳は小宮秀陵（こみや ひでたか 啓明大学校招聘助教授）が草案を作成し、邊英浩（ピョン ヨンホ 都留文科大学教授）が点検した。なお以前の本研究紀要では、邊英浩を辺英浩、BYEON Yeong-hoをPYON Yonghoと表記した論説があることを付記しておく。

1. 問題の所在

2013年8月13日、安倍晋三総理大臣は萩にある吉田松陰の墓所を参拝し、多くの韓国メディアがこれを報道した。日本の敗戦日である8月15日を目前に新総理の靖国神社参拝に周囲の耳目が集中していたからである。靖国の代わりに選んだ吉田松陰の墓所はどの

ようなところだろうか。吉田松陰は韓国人にあまりなじみのない人物であるため、韓国の読者にとって墓所参拝のニュースは興味を引かなかった。韓国の言論界でも吉田松陰に関する知識がなく、報道記事の誤謬も多かった。

吉田松陰は1830年に生まれ、30歳の若さで幕府の禁令を犯した罪により斬刑に処された。韓国の記事では、「大東亜共栄圏の論客」「帝国主義侵略の論客」とするなど彼を、間違っ
て紹介していた。彼が生きていた時代には帝国主義、大東亜共栄圏という用語はまだ登場していないからである。参拝の場所も「松陰神社」と報道していたが、写真を見てもそこは吉田松陰の墓所の前にすぎない。松陰神社は吉田松陰が弟子を教育した松下村塾の隣に建てられたもので、墓所からは少し離れている。このように多くの誤謬を含んだ報道がなされているため、安倍総理による墓所参拝の意味が、読者たちに正しく伝わったとはいえない。実際に、韓国のどの言論媒体も彼の参拝を批判した論評や社説はなかった。安倍総理は以前最も尊敬する人物が吉田松陰であると明らかにしていた。そのため彼の参拝は政治的趣向よりも個人的趣向によるものとみる傾向もあった。

吉田松陰は明治維新を主導した長州藩閥の師匠である。木戸孝允、高杉晋作、伊藤博文、山県有朋、山田顕義など、明治維新と韓国侵略で殊勲をあげた多くの人物が彼の影響を受けている。彼は松下村塾で萩の下級武士出身の弟子たちに尊王攘夷と征韓論という日本の進む2つの道を教えた。前者は幕府を打倒し、天皇制による中央集権国家の樹立した思想であるため、隣国が反省すべき問題として触れる必要はないかもしれない。西洋の近代資本主義勢力の出現を前にした日本が、力を結集するために分権的な幕府を捨てたのは賢明な選択であったといえるだろう。しかし、後者の対外侵略主義は東アジア、ひいては世界史の悲劇を引き起こしたのであり、けっして称賛されるべきものではない。現日本総理が彼の墓所を訪れたことも問題であるが、侵略政策のもっとも大きな被害国である韓国が参拝対象の知識不足により、参拝の意味を正しく理解できなかったというのは悲劇ではなく喜劇とも言える。安倍総理の吉田松陰の墓所参拝は、自分自身が「帝国日本」という昔の栄光を取り戻そうという思いの表れであった。

安倍総理は内閣出帆1周年にあたる昨年(2013年)12月26日に靖国神社を急遽参拝した。靖国神社は明治政府成立の翌年、1869年に東京招魂社として創建された。当初は内戦で戦死した幕府側と維新側の人々の靈魂を慰労するために建てられた神社であった。1871年の「台湾出兵」をはじめとして明治政府は対外膨張政策を進めたが、その際に犠牲になった人々の靈魂を合祀した。その結果愛国心が作用し、1879年に天皇により別格官幣社となり現在の名前へと変更された¹。1895年、日清戦争の戦死者1500名が合祀され、招魂社は大日本帝国の膨張主義の象徴となっていった。同年12月には招魂式や3日間におよぶ臨時大祭が行われ、明治天皇が「大元帥」として直接参詣することで格式を大きく高め

1 靖国とは、国を平安に保つという意味で、戦死の功をたたえる言葉である。別格官幣社とは、国家に対して功績のある臣下や国家のために死去した兵士を祀る神社という意味で、一般の官社や地方の国社の上に置かれたものである。

2 高橋哲哉著、ヒロン・デフン 玄大松訳『決して避けることのできない靖国問題』歴史批評社、2005年、45～46頁。(原題は『靖国問題』筑摩書房)。

た。10年後の日露戦争の際にもこの神社は利用され、日本国家宗教の施設として位置づけられるようになった²。

この経緯から靖国とは吉田松陰の弟子たちが師匠の教えに従い対外政策を遂行しつつ、「国のために」犠牲になった人々の英霊を慰労する場所であり、吉田松陰の墓所や松陰神社と連繫した関係にあったといえる³。安倍総理の歩みはこの道を正確に、そして順序どおりに行っているのである。

徳富蘇峰（1863～1957年 本名：徳富猪一郎）は明治から昭和へかけて日本帝国の代表的論客、評論家として吉田松陰の膨張主義に対する国民的共感の基盤を生み出した主役であった。彼は、1880年代に『国民之友』『国民新聞』などの言論媒体をつくり、平民主義の民権運動を熱烈に展開した⁴。しかし、1890年代に入り日清戦争（1894年7月）を目前にして国粹主義へと「転向」した。この戦争を文明（日本）が野蛮（清、朝鮮）を撃滅する聖戦であるという福沢諭吉の見解に同調し、日本国民が世界を相手に自信と誇りを養うきっかけになると言い、率先して戦争を美化した。戦争に関する報道では『国民新聞』がもっとも扇動的であった。そして1904年日露戦争時の総理大臣桂太郎の政治派閥の一員となったように、日露戦争を美化する国際言論活動を主管した。彼は、韓国人が日本の保護国になるのを歓迎しているという論調の記事を躊躇せず全世界に向けて発信した。1905年「保護条約」、翌年初の統監府が建設された。1908年に彼は大韓帝国言論統制の権限を受け、韓国の新聞を廃刊させる弾圧政策に関わった。その功勞により、彼は1910年8月「韓国併合」強制後、総督寺内正毅から朝鮮総督府の機関誌である『京城日報』を「監督」する任務を受けた。これは1918年8月までの8年間「武断政治」の確立に大きな影響を与えた。寺内正毅総理大臣の在職期間（1916年10月～1918年9月）に、彼の韓国での地位と権限に変動はなかった。寺内正毅が総理から退くと徳富蘇峰も「植民地朝鮮」から離れていった。

吉田松陰と徳富蘇峰は日本帝国が行った韓国侵略の精神的支柱の役割を果たした存在である。だとすれば日本の韓国侵略を批判する研究や言説では必ず取り扱うべき重要人物といえよう。しかし信じがたいごとく、彼らに関する研究は韓国の歴史学界ではほとんど見られない⁵。この状況のままでは、もっとも大きな被害を受けた国家、韓国がその膨張主義の再現といわれる今日の日本の右傾化を放置することにもつながるだろう。すでに遅き

3 長州藩は1865年に藩の中心地山口に幕府と闘い戦死した英霊を祀るために桜山招魂社をたてた。そして、1903年日露戦争を前に、日清戦争（1894-1895年）で戦死した山口県出身の英霊7158株を合祀し、山口護国神社と名称を変更した。ここには吉田松陰、そして彼の弟子久坂玄瑞、來島又兵衛、大村益次郎など幕府打倒のための功勞者、そして、吉田松陰に武術の勉強に大きな影響を与えた月性を祀っている。

4 これについては日本の歴史学界で多くの論著がある。最近の研究成果については次の論文を参照。和田守「徳富蘇峰と平民主義」『聖学院大学総合研究所紀要』第49号（2011年3月）。

5 丁日聲チョン・イルソン『日本軍国主義のゲッベルス 徳富蘇峰』（知識産業社、2005年【韓国語】）が徳富蘇峰を書名にあげた韓国内唯一の著述である。

に失した感もあるが、2人の人物に対する日本学界の研究成果を日本による韓国侵略史との関係に焦点をあわせつつ紹介することで今後研究が活性化される端緒となれば幸いである。

2. 吉田松陰の国際情勢観とアジア雄飛論 — 征韓論の起源

吉田松陰は1830年8月に萩で藩の武士、杉百合之助の次男として生まれた。1834年に長州藩の山鹿流（兵学流派）の師範である叔父（吉田大助）の養子となった。翌年に別の叔父が運営していた松下村塾で指導を受けた。しかしアヘン戦争で清が西洋列強に大敗したことを知ると、山鹿流派の兵学が時代遅れであると考え、1850年、西洋兵学を勉強するために江戸へ向かい佐久間象山に師事した。佐久間象山とは、西洋の兵器が日本のものより進んでいると知り、はじめて西洋式砲術の活用法を研究した兵学者であった。1852年吉田松陰は東北地方に旅行した際、友達と出立日の約束を守ろうとして、長州藩からの通行証発行を待たずに脱藩した。東北地方への旅行で見聞を広めたが、江戸で脱藩の罪により士籍を剥奪され、世禄の没収処分を受けた⁶。

1853年アメリカのマシュー・ペリー提督が浦賀に来ると、吉田松陰は佐久間象山と黒船を見物に行った。この時、彼は西洋の先進文明に大きな衝撃を受け、西洋でその技術を直接学んでこようと決心した。単純に日本の事業発展に寄与するためではなく、神聖な天皇の国、日本を西洋の武力から守るために、防禦力の構築を重視したからであった。そこで、長崎港に到着したロシア軍艦（プチャーチン号）に忍び込み乗船しようとしたが、クリミア戦争でこの軍艦が予定より早く出航したため失敗した。翌年（1854）ペリー提督が日米和親条約締結のために再び訪日した際、この船に乗船し密航を要請したが、また拒絶された。この事実が幕府に知られ、取調べをうけて拘禁、その後故郷長州に押送され野山獄に幽囚された。この時、獄中にて密航の動機と思想的動機を記した書が『幽囚録』である。1855年に出獄を許可され、生父の家（杉家）に幽閉という処分を受けた。

1857年に叔父が運営した松下村塾の名義を引継ぎ、生父の家を増築し、同じ名前の学校を開き生徒を教えた。この松下村塾で吉田松陰は高杉晋作など数十名の弟子を育てた。「討論型」の教育方法⁷、登山、水泳教育まで行ったため、今日の「生きた学問」を志向し

6 吉田松陰の旅行は次のように4度に分けて行われ、その距離も2万里に達するものと推定される。大部分は徒歩によるものであり、③④では船を利用した。①1850年8月25日から12月29日まで長崎、平戸、熊本、佐賀、小倉などを遊歴した「九州『遊学』」②1851年12月14日から江戸を出発し水戸、竜飛岬（本州最北端）、新潟、出雲などをまわり、また江戸に戻る「東北遊歴」③1853年1月26日から5月24日まで三田尻、広島、大阪、奈良、高田、山田（伊勢）、高崎（群馬）、江戸などをまわった「諸国遊歴」④1853年9月18日から11月24日まで長崎に停泊中のロシア軍艦プチャーチン号に乗船すべく江戸から長崎へ向かった「長崎紀行」などがある。海原徹『吉田松陰と松下村塾』（ミネルヴァ書房、1990年）第1章第4節諸国遊歴の旅参照。

たものと評価されている。

1858年幕府が天皇の勅許を得ずにアメリカと修好通商条約を締結したため、吉田松陰はこれに強く抗議した。この時彼は日本発展の最大の障害は幕府にあると考えて、幕府を批判する態度を強硬に主張したため、再び逮捕された。ついで大老井伊直弼の安政の大獄により、彼に死罪の処分を下したため、1859年斬首された。「死罪」3名のうちの一人であった。弟子たちが残した獄中の吉田松陰の記録『留魂録』冒頭部には「身はたとひ 武蔵の野辺に朽ちぬとも 留め置かまし 大和魂」という内容の文句が残っている。古代大和朝廷で行われた天皇制の再現こそが日本の生き残る道であるという意味を表したものであった。征韓論と表現される彼の対外膨張主義は、一次投獄の際に書かれた『幽囚録』にみられる。『幽囚録』は、西洋勢力が蒸気船で、東アジアへ出現した状況に対する強い危機意識から生まれている。おもな部分を要約すると次のとおりである⁸。

皇和の国[日本]は大海の中に位置し、大陸と遠く離れているので、外勢が容易く犯すことはできなかったが、今、蒸気船[火輪船]が作られ海外万里もすぐに比隣となり、むしろ大きな患いとなった。西の中国で洋敵が盛になるとその患害は言い尽くせず、神洲の東がアメリカ[亞彌利堅]、カムチャッカ[加模察加]、オホーツク[奥都加]になることで、アメリカとロシアが甚大な患害となった。近来聞くところによればロシアがカムチャッカ、オホーツクに兵士を駐屯させ大鎮を置いたといい、カルフォルニア[葛利火爾尼亞]のようなどころではまさに我々と向かい合って海を隔てているが、ここ数年火輪船に乗ってしきりに我々に近づこうとしている。広大な土地を持つその国が我々の神洲の土地を貪り、神洲の災禍を狙っているのだとすれば、その禍が次第にロシアに勝るとも劣らないほど危険になることを察しなければならない。神洲の南にあるオーストラリア[濠斯多辣利]は天度(緯度)の中間地帯にあり、草木は繁茂し、人民は栄え人々は互いに争うところとなった。今の英国[英夷]が開拓しているが、いまだ10分の1に過ぎないので我々がこれを先に得る事ができれば、大きな利益になるであろう。神洲の西北には朝鮮と満州が続いている。朝鮮は昔我々に臣属していたが、今はそうではないので、まず、その風教を詳しく把握し、これをもう一度回復すべきである。万国のうち日本をとりかこんでいる形勢がまさにこういう状態にあるので、ただ手を結んでいけばいいというわけではないであろう。ヨーロッパの地は非常に遠く離れているので、昔から我々と通交したことがないというわけではないが、船艦が発達してポルトガル[葡萄牙]、スペイン[西班牙]、イギリス[英吉利]、フランス[拂郎察]のような国々はすでに我々と顔を寄せ合うほどになり我々の心配の種となった。近年火輪船を持たない国はなく、遠くのヨーロッパともむしろ隣国の

7 吉田松陰は野山獄で11名余りの罪人を教えた経験をもとに松下村塾を開いたといわれる。そして学生たちは決められた時間に来るのではなく、家事手伝い以外の時間に松下村塾を訪れると個別指導を行った。これを現代的に「討論型」教育と規定している研究もある。海原徹前掲書、第3章、第4章参照。

8 山口県教育会編『吉田松陰全集』第1巻、岩波書店、1940年、347～350頁。

ようになった。

吉田松陰は今日の世界情勢をこのように理解し、ここから今後日本が国を保全するためにすべき課題を次のように提示した⁹。

太陽は昇れば必ず落ち、月は満ちれば欠けるように国もまた栄えれば衰えるものである。それゆえ国を保つにはただ持っているものを失わないようにするだけでなく、ないものを得て増やす必要がある。今急いで武備をおさめ、艦船の計画[艦略]をたて、銃砲の計略[礮略]をきちんとすれば、きっと蝦夷を開拓[開墾]し、諸侯を封建し、折を見てカムチャッカ、オホーツクを奪取し、琉球を論し、朝覲会同させ内諸侯と同じくし、朝鮮を責めて納質させ、朝貢を行わせ古来の盛時と同じくし、北側の満州の土地を割き、南は台湾、フィリピン[呂宋]の様々な島を収め漸進的に進取の勢いを見せなければならぬ。そうした後に民を愛し、士を養成し、慎重に辺境の周囲[邊圍]を守れば、きっと国を善く保つことができるだろう。このようにすれば、そのうちに多くの群夷が争い集まる中心に居座り、うまく足を挙げたり手を動かしたりしなくても国は変わらないだろう。

吉田松陰は、当時西洋諸国がすぐ日本を併呑するかのような緊迫した国際情勢下にあると考えていた。また武士社会特有の緊張感もみられる¹⁰。彼は『幽囚録』で孫子の兵法である「知彼知己」に何度も言及している。興味深いことに彼は克服の道を他国、他者の奪取に求めた。ロシアのカムチャッカとオホーツク、オーストラリア、朝鮮と満州などがその対象として挙げられる。蝦夷(北海道)の開拓はカムチャッカ、オホーツク進出のための前線基地確保と見られ、オーストラリアへの進出は英国との競争関係から考えだされたものであり、ともに興味深い。朝鮮と満州への進出は歴史の中からその根拠を引き出している。すなわち朝鮮は本来古代日本の盛代に「臣属」として朝貢したが、いつの日か行わ

9 同上書 350～351頁。吉野誠『明治維新と征韓論 —吉田松陰から西郷隆盛へ—』(明石書店、2002年) 56～57頁。

10 吉田松陰の旅行のうち特に1851年から翌年にかけての「東北遊歴」は異船、すなわち西洋汽船の侵攻に対する防禦の実体を直接巡見することにあつた。彼は青森県と北海道のあいだの竜飛岬で防備が非常に貧弱であると嘆いていた。海原徹前掲書 32-33頁参照。日本列島の海岸を巡見するかのような彼の旅行がむしろこうした極度の緊張感を伝えている。和田春樹氏は力著『日露戦争 - 起源と開戦』下(岩波書店、2010年)において「明治維新をなしたげた日本人は文明開化、富国強兵に先立ち領土の拡大を夢見た。」としつつ、国家改造モデルをロシアのピョートル大帝の改革に求めたのだが、佐久間象山の場合は、ピョートル大帝が海軍力を育成し、スウェーデンを征服し、東はサハリン境界まできて世界最大の国家になったことを直接言及した点を紹介した(373～374頁)。吉田松陰は佐久間象山を師匠とあがめ、このような思想と知識から影響を受け、日本の先占対象として周囲の諸国を挙げたものと思われる。これについては今後別途の研究が必要である。

れなくなった。そのため朝鮮を咎め、人質を送らせ、昔のようにもう一度朝貢させる必要がある。その後これを土台にして満州へ進出しなければならぬとした。神功皇后の新羅征伐、つまり征韓の歴史が明示されたのである。

『幽囚録』は古代日韓関係の歴史について3分の1の紙面を割く。『日本書紀』の日韓関係記録を53個列挙しているが、それは2つの観点からであった。1つは先進文化受容の歴史的経験としてであった。いわゆる炳隣師法の歴史解説である。韓半島から先進文物を受容し、皇和の盛世であった古代の歴史はきっと今日の危機克服の道標となるというものである。すなわち、西洋列強の技術文明に対する顕著な遅れは、結局その文明の受容により解決でき、それを基盤にもう一度「皇和の盛世」を再現しようという考え方である。彼がロシア、アメリカの軍艦に乗り、西洋諸国へ行こうとしたのも西洋文明に直接接して、それを学ぼうとしたためである。幕府打倒の絶対的必要性、天皇中心国家樹立の理由がここにあることは言うまでもない。2つめは大陸、韓半島の先進文化を受容して樹立した大和朝廷が、韓半島諸国の無礼を責め朝貢させた歴史をもとに日本の将来の青写真としていることにある。この事実の当否は吉田の関心事ではない。明治日本の政治的指導者と歴史学者が何度も強調した「征韓論」とは『幽囚録』から生まれたのである。そしてこれが明治日本の政治指導者のなかでバイブルのように機能したため、強固に立論されたのである。獄中で書いたにもかかわらず、『日本書紀』の関連記事を53個も提示したため、後輩たちが金科玉条とまで考えるようになっていった。

吉田松陰はアメリカをはじめとする西洋列強との優劣の比較から、日本は艦船と銃砲のどちらも勝算はほぼないと考えているようである。それゆえ屈辱を受けないためにはその技術を急いで学ぶ必要がある。アメリカとの条約で何度も屈服させられた責任は幕府にあり、国威が失墜したため、幕府は存続する理由すら失った。今後日本は天下君臣が上下一体となって軍隊を強化し、内乱を防ぐために人心をしっかりとつかまねばならない。受動的な開国は日本という国を滅ぼすことにつながる。ロシアとアメリカとは条約の章程を厳格にして信義を篤くする。そしてその間に国力をたくわえ、貿易で失われた部分は朝鮮、満州など他の所の土地を奪い補填していかなければならない。

このような吉田松陰の侵略的情勢観はよく征韓論と呼ばれるが、けっして韓半島だけを対象にしてはいない。むしろ内容からは「アジア雄飛論」というべきものである。驚くべきことは彼の提示した日本の未来像が実際にそのまま侵略戦争の形態で実践されたという事実である。彼が帝国日本の師宗になったことは間違いない。萩の松下村塾で教えた彼の弟子たちは明治政府下で藩閥勢力の形成、政権の掌握、同調勢力の拡大、後継勢力の養成を行った。その結果、吉田松陰の構想は明治から昭和まで日本帝国の運命を決定付けるものとなった。

3. 1890年代初吉田松陰の顕揚事業と資料集『吉田松陰伝』（全5巻）刊行

吉田松陰の死後、長州藩の武士たちは彼の教えを引き継ぎ「攘夷」と「倒幕」に全力を傾けた¹¹。薩摩、土佐、肥後藩などと提携し、1867年12月に幕府を倒し、翌年天皇制国家の樹立に成功した。しかし、反対勢力との闘争は戊辰戦争を引き起こし、提携勢力間の

軋轢を生み、西南戦争(1877年)にいたる諸々の内乱へとつながった。新体制の構築過程で既得権を失った士族、徴兵制や税制改革(地租)などで負担を感じた農民の反発も大きかった。

長州、薩摩などの藩閥勢力は政府を掌握したが、その他の社会勢力は議会の開設を目標に民権運動を起こして政府に激しく対抗し、また批判した。1881年在地主族、地主、自作農を基盤とする自由党が結成され、翌年には都市の知識人と商工人の階層の意向を示す立憲改進黨が創立され、藩閥勢力と権力をめぐり競った。しかし、議会政治を1つの目標とするにはいまだに社会的基盤が貧弱であったため、藩閥勢力と闘うには限界があった。藩閥勢力は、軍人勅諭(1882年)、徴兵令の改正(1883年)、内閣制度の発足(1885年)、帝国憲法の発布(1889年)などを通じて天皇制国家の政治的基盤を固めていった。長州出身者は藩閥勢力の中でも中心的役割を果たした。しかし師匠吉田松陰への追尊事業は容易に執り行うことができなかった。

1880年代になると幕府末期の混沌のなかで明治維新に寄与した人々の伝記が見られるようになる。1886年5月に出版された『近古慷慨家列伝』(東京、春陽堂)がその代表例である¹²。吉田松陰は35名の対象者のうち、6番目にあげられている¹³。割かれた紙面は13頁である(106～119頁)。編者の芝山居士は、島根県の平民西村参郎であり、発行者は岐阜県の平民和田篤太郎であった¹⁴。この本についている4つの序文¹⁵を通じて明治

11 明治維新は幕府打倒により成功した。ところでこの幕府打倒の「大業」で長州藩主毛利敬親の果たした役割について日本の歴史学界の評価は明確ではない。彼は藩の武士吉田松陰が1859年幕府に尊王論を掲げ幕府から死刑の処分を受けて処刑された後、1863年5月藩主として最初に「尊王」すなわち天皇を奉ずべきであると上訴した。これは幕府への挑戦状であった。つづいて彼は幕府の許可を得ずに狭小な萩から昔の藩都である山口に都を移し、ここで藩士を指揮して幕府打倒の後ろ盾となった。藩主毛利敬親のこうした役割に関する評価が少ない点は、吉田松陰とその弟子である武士たちの活躍との相互関係から再検討する必要があるように思われる。1600年関ヶ原の戦いで西軍の総大将毛利輝元が東軍の徳川家康に敗れ、外様大名として萩に隔離されたことから見て、毛利敬親の幕府打倒の指揮は過去の敗北に対する雪辱の意味があったようにも思われる。ただし、この点に関する先行研究での指摘は見いだしがたい。

12 田中彰『吉田松陰 一変転する人物像一』(中公新書、2001年)の解題では、この本の初刊は1884年11月であるとする(8頁)。ところで、筆者が見たソウル大学中央図書館所蔵本第7版の版權に明示されているところによれば、第1版は明治19年(1886年)5月27日となっている。そして毎年版を重ね、明治24年(1891年)2月の第6版につづいて9月に第7版が刊行されている。

13 田中彰は同上書において、1884年刊行本では、吉田松陰をはじめとする10名が対象になったとし、ほかの9名の名前を次のように列挙した。すなわち頼山陽、頼三樹三郎、水戸斉昭、月照、渡辺崋山、平野国臣、堀織部(利熙)、武田耕雲齋、雲井竜雄などである。ところで筆者がみた第7版の目次にはこの10名の前に佐久間象山など5名、そして次に高杉晋作など20名が挙げられている。第7版では、総35名の伝記が収録されている。

維新の功労者の顕揚という意図のほかに、「平民」の立場と関連した特別な編纂の意図を見出しがたい¹⁶。ともかく1882年の初版以来、1886年までの5年間に第7版までに及んだため、多くの読者層を確保していたのは間違いなからう。

1890年吉田松陰の故郷に小規模な神社が建てられた。松陰の本家である杉家に実兄杉民治が小規模な祠堂〔土蔵造構造〕を建て、松陰の遺言に従い愛用の硯〔赤間硯〕と書簡を神体とし、「松陰社」を創建した。しかし、規模や建立の主体からみれば、弟子たちが力を合わせた次元のものとは考えにくい。つづいて1891年（明治24）8月に吉田松陰に関する単独著述が初めて出された。野口勝一、富岡政信編の『吉田松陰伝』全5巻（野史台蔵版）がそれである。しかし、この本も長州出身の人士が直接編纂者になったのではなかった。編纂者2名は旧水戸藩の士族出身者であり、『維新史料』編纂事業を行ううちに吉田松陰の史料が多く、彼の伝記を別途に編纂するようになったという¹⁷。

水戸藩は幕府時代にも歴史編纂の伝統があり、また、朱子学的伝統論、名分論に強い志向をみせ、幕末に尊皇攘夷を掲げて強い国粋主義の性向を発揮したという特徴がある。1890～91年は藩閥政府が民権運動を抑圧しつつ、政権安定を確保した時期であった。この時期に水戸藩出身の士族が維新関連の史料を収集し吉田松陰の伝記を単独で出版するようになったのは偶然ではないだろう。こうした脈絡からは1890年に松陰の故郷にはじめて神社が建てられたことも注目する必要がある。

ただし吉田松陰を扱った最初の著書である『吉田松陰伝』は本格的な伝記とはいえないように思われる。〈凡例〉に「従来の文士の著作のように取捨潤滑して編章を作った」としたように、儒家の文集の「年譜」形式の史料として整理したものである。編纂者はこれを「編年的松陰史料集」とであると表現し¹⁸、各編の頭註に「年譜」と明示した¹⁹。要するにこれは吉田松陰に関する最初の資料集の編纂であったといえる。こうした資料編纂事業は、もちろん長州出身の門下生や子孫の助けがなければ不可能なものである。これに大

14 田中彰同上書8頁。平民とは明治政府が1871年に「四民平等」のもとにたてた身分の区分、すなわち、皇族、華族（公卿、大名）、士族（家臣）、平民（農工商人）の平民を示すものである。

15 初編序（1882年、雲潭 大野太衛撰）、二編序（1884年、一筆生 磊磊識）、三編序（1885年、三樹生）、四編序（1886年、武陽 楊洲生）。

16 これについては田中彰の前掲書で、1884年に自由民権運動がいわゆる「豪農民権」から「農農民権」へとその主体の階層が下がっていていることと関連性があるとしているが（23～24頁）、もう少し細かい分析が必要であろう。この『列伝』の吉田松陰伝記は、(1)時代の申し子(2)山鹿流兵学家(3)長崎行、東北行(4)黒船来航と「下田踏海」(5)野山獄、そして松下村塾主宰(6)「草莽崛起の人」(7)断罪—松陰の死などの章構成となっているが、これは以後多く踏襲され、1つの定型を提示したものと評価できるとしている。

17 田中彰前掲書4～7頁。

18 田中彰前掲書7頁。

19 筆者はソウル大学中央図書館所蔵本を活用した。

きく寄与した人々が内側の表紙に次のように記されている。(分類は筆者)

題字: 公爵 毛利元徳、伯爵 伊藤博文、伯爵 山県有朋

題辭: 伯爵 山田顕義

序文: 子爵 品川弥二郎、子爵 野村靖

書翰: 男爵 楫取素彦

跋文: 後嗣 吉田庫三

毛利元徳は長州藩藩主の後裔であり、伯爵伊藤博文、山県有朋は吉田松陰の弟子のうち明治政府と軍部を代表する人物である。山田顕義も陸軍出身で司法大臣を歴任した。品川弥二郎も同じ長州出身の下級武士として松下村塾の門下生としてドイツの駐在公使、内務大臣を歴任した。彼は特に師匠吉田松陰関係の資料をたくさん収集してこの本の編纂にもっとも大きく寄与した人物である。楫取素彦は長州藩の士族出身者で藩校に通い、のちに吉田松陰の妹と結婚して松陰の生前の活動を直接援助し、官吏としても議官、顧問官、貴族院議員などを歴任した。

このように長州藩閥の中樞がすべて編纂事業の支援にあらわれたというのは長州勢力のなかでもやっとな余裕が生まれてきたことを意味する。同時に自分たちが実践してきた師匠の教えの世界を顕彰することが政治的にも有利だと判断し始めたとも見られる。この時期は、まさに清国との一戦を目標に1890年7月の総選挙を経て開院した議会で、軍備予算確保のため政府が政党と闘争していた時期であった。清国との戦争は師匠松陰が日本帝国が生き残る道として大陸進出に注力せよという教えを実践したものであった。こうした状況と関連してこの編纂事業に対して「松陰伝の叙述への慎重な雰囲気、門下生をはじめとする松陰の周辺に漂っていたことがわかる。この異様なまでの慎重な雰囲気が、しだいに松陰を絶対的な聖域へとまつりあげていくひとつの伏線になった、といえるだろう」という論評は注目される²⁰。

編纂者の野口勝一は、後記にて松陰に対する共感の大きさが編纂を行う動機となったが、彼の伝記を書く事は難しいと思い、すべて松陰自身の著作や手記、意見書などそれ自体によって語る史料集の手法を取ったという。また、山田顕義の収集資料のほかに楫取素彦と嗣孫である吉田庫三の蔵書も最大限活用したという。史料集『吉田松陰伝』全5巻の刊行は本格的な吉田松陰の伝記が世に出る契機となった。これに最初に手をつけた人物が徳富蘇峰である。

4. 徳富蘇峰の初版本『吉田松陰』(1893年)と日清戦争

1) 徳富蘇峰の平民主義民権運動と革命家「吉田松陰」

徳富蘇峰は前述のように1880年代の明治日本の代表的平民主義の民権運動家の一人であった。九州の肥後、すなわち熊本県出身である彼は熊本洋学校、東京洋学校、同志社英

20 田中彰前掲書 6頁。

学校に通いつつ、英国をモデルにした日本の近代化に思いをはせた。1881年熊本へ帰郷した状態で自由民権運動の結社である相愛社の会員になり、民権運動へ進んで参加した。翌年3月に熊本大江義塾を開いて民権運動の影響を受けた教育活動を展開し、著述活動にも情熱を傾けた。1885年6月に『第十九世紀日本の青年およびその教育』を自費出版し、翌年7月にはまた『日本の将来』を脱稿し、原稿を持って高知にいた板垣退助を訪ねた。板垣は自由党を率いる民権運動家であった。しかし、彼からは良い反応を得られずに、東京へ行き、田口卯吉の経済雑誌社を訪ねた。田口は20代初めに『日本開化小史』を出版し、名声を得て出版社を樹立し、民権運動の重要な一角を担っていた。田口は蘇峰の原稿を受けとり出版した²¹。

徳富蘇峰は帰郷して大江義塾を廃校、整理して家族を連れ東京へもう一度向かった。1887年2月民友社という名前の出版社を設立し、月刊雑誌『国民之友』を創刊した。日本最初の総合月刊誌であった。当時彼は24歳の青年であった。蘇峰は3年後の1890年に日刊誌『国民新聞』を創刊し、民権運動に拍車を加えた。彼の民権運動は「人民全体の幸福と利益」を追求する平民主義を理想にしており、国会開設運動を目指した激動の1880年代の日本思想界、言論界に大きな影響を与えた²²。平民主義は「平民的欧化主義」を追求するもので『国民之友』を通じ、次のように志向性を規定した。「武備主義」に対して「生産主義」を重視し、「生産主義」を中心とする自由な生活社会、経済生活を基盤に個人に与えられた天賦人権の尊重と平等主義があふれるような社会の実現を目標にした。「腕力の世界」に対する批判と生産力の強調を含み、自由主義、平等主義、そして平和主義を追求するという特徴があった。

『国民之友』は西洋諸国を模範にする日本近代化の必要性を強く説明し、政府が推進する「欧化主義」については「貴族的欧化主義」と批判し、三宅雪嶺、陸羯南などの政教社がかかげる国粹（保存）主義に対しても国民の自由拡大と生活向上のためには上からではなく、下からの西洋化（開化）が必要だと反駁し、平民的急進主義の主張を展開した。さらに当時の藩閥政治のみならず民権論者のなかにもよくある国権主義や軍備拡張主義についても批判的態度をとった。

彼の言論媒体は自由党の板垣退助、後藤象二郎、立憲改進黨の大隈重信3名を「改進黨政治家」と評価し、彼らが互いに民党へ連合するよう促した。1889年「大日本帝国憲法」が公布され、翌年総選挙を通じた帝国議会の開設が予告された。大隈、後藤などは黒田清隆内閣（1888年4月～1889年12月）に入閣したが、さしたる成果を挙げることはできなかった。こうしたなか、第1回総選挙が予告され、彼は総選挙に民権運動側が勝利するよう「進歩党連合」を熱烈に叫んだ。しかし、指導者間の連合も難しく、さらに衆議院選挙は納税額を基準に選挙権が与えられていたため、有権者の98%が地主であり、商工業所得税による有権者は2%に満たなかった。英国をモデルに都市の商工業に期待を抱いていた大隈をもっとも支持した蘇峰には衝撃的な現実であった。

21 徳富蘇峰の伝記的叙述は、基本的に米原謙『徳富蘇峰—日本ナショナリズムの軌跡—』（中公新書、2003年）にしたがう。

22 以下蘇峰の民権運動に関しては、おもに米原謙の同上書による。

第1回総選挙(1890年7月)の結果は、立憲自由党130席、立憲改進黨41席、大成会79席、国民自由党5席、無所属45席であった。立憲自由党と立憲改進黨は民党とみなされ、残りは政府が立てた勢力で吏党と呼ばれた。民党171席、吏党129席の比率で民党が優勢であった。第1議会、第2議会において2度召集された議会の主要議事は政府の予算審議であった。軍事費の増強、特に軍艦建造費の予算について民党と政府間の対立は深刻であった。1891年12月末に議会在解散され、翌年2月に第2回総選挙が実施された。

結果は民党132席(自由党94、立憲改進黨38)、吏党137席(中央交渉部95、無所属42)、独立倶楽部が31席を占め吏党が優勢な状況へと変化した。1892年5月～6月に第3議会、11月～1893年2月に第4議会が開かれたが、まだ軍艦建造費に関する予算審議が重要な事案であった。こうした政治状況下で徳富蘇峰は吉田松陰に注目したのである。

徳富蘇峰はこの年(1892年)春に本郷会堂で吉田松陰をテーマに講演を開いた。そしてその講演の原稿を直して同年5月～9月に発刊された『国民之友』に10回にわたり連載した。講演と連載の目次を比較すると<表1>のようになる。

「講演筆記」の目次は吉田松陰の30歳の人生の一代記に相応しいものである。前述した1880年代の『近古慷慨家列伝』に掲載された「吉田松陰」の伝記の内容も整理すると両者は似ている。『列伝』に掲載された「吉田松陰」について研究者田中彰は内容と目次を次のように分類した²³。

(1) 時代の児 (2) 山鹿類兵学家 (3) 長崎行、東北行 (4) 黒船来港と「下田踏海」 (5) 野山獄、そして松下村塾主宰 (6) 「草莽崛起の人」 (7) 断罪 - 松陰の死

<表1>の「講演筆記」をこれと比較すると(8) 松陰と攘夷 (11) 革命家の資格 (12) 松陰とマヅィーニ(マッツィーニ)などの3つが上の目次からは見出せない項目である。これはきっと徳富蘇峰が講演で吉田松陰に対して新たに注目した点であったのだろう。攘夷、すなわち神州を侵犯する洋夷を追い払おうとした吉田松陰の精神は新しく評価され、また「局面打破の急先鋒」としての革命家の姿を吉田松陰の業績に見いだそうとしたのである。イタリアのジュゼッペ・マッツィーニ(Guisippe Mazzini 1805～72年)が革命家として比較対象になったことも注目される。マッツィーニは革命の目標であるマルセイユで「青年イタリア」を組織して王政打倒によるイタリアの統一と国民国家の形成を説破した革命家である。マッツィーニが共和主義、松陰が尊王論を主張したという違いはあるが、すべて国家統一を第1目標とし、その目的のためには手段を選ばない点で両者は一致すると蘇峰は主張した²⁴。徳富蘇峰が吉田松陰をこうした観点から照明したことは明治の藩閥政府に対する批判と「第2の維新」に対する希望によるものであったといわれている²⁵。講演して雑誌に連載された時期、つまり1891年の春から翌年の5～9月の期間は前に指摘したように、民権運動の政党が議会を通じて藩閥政府と熾烈に闘った時期ではあるが、藩閥政府に勝つ見込みはなかった。徳富蘇峰はこのような状況下で吉田松陰のような人物の登

23 田中彰前掲書10～22頁。

24 米原謙前掲書107頁。

25 田中彰前掲書32頁。

場が必要だと切実に感じていたのであろう。

2) 徳富蘇峰の大日本主義への「転向」と初版本『吉田松陰』（1893年）

『国民之友』「吉田松陰」は1892年9月に10回の連載を終えた。徳富蘇峰はこれをもう一度大幅に書き直し、1893年12月に単行本『吉田松陰』を出版するようになる。約15ヶ月の時間を費やし本が出版された。ところで徳富蘇峰はこの期間に膨張主義関連の文章を発表し、民権運動から離れる姿勢を見せている。

『国民之友』1893年1月号(179号)の論説「大たる日本」が掲載された。「大たる日本」はすなわち「大日本主義」を意味するもので、以後この用語は彼の文章でよく登場するようになる²⁶。この文章で彼は東洋での「大たる日本」の建設の必要性、朝鮮問題や貿易植民問題の重要性を強調して、吉田松陰が日本は列強からの圧迫の中で生き残るために対外膨張姿勢を失ってはならないという遺訓を支持している。藩閥政府が清国に対して戦争を起こすことを断絶したかのような文章である。彼は日清戦争がおきる直前に『自主的外交』（1894年5月）という小冊子で「日本人の日本」という造語を通じて「大たる日本」をつくるのに日本国民が進んで行うべきことを力説した²⁷。彼は今までの平民主義を対外膨張主義へと転換する論理を探していた。ではこの間にどのような問題が起こっていたのか。

第4議会が開催中であった1893年2月28日に天皇の「和協の詔勅」が下された。建艦予算のために民党と政府間の軋轢が解消されないため天皇が立ち上がったのである。詔勅は宮廷費を節約して文武の官吏俸給の一部を建艦の予算につぎ込むので議会が協調するようにという内容であった。天皇の詔勅に反対する政党はなかった。この頃議会と政府の間に緊張関係を起こしたほかの問題がもう1つあった。条約改正問題である。

1892年11月千島艦が英国の軍艦と衝突する事件が発生した。この事件の処理に領事裁判に関する条約内容の問題をめぐって政党間で条約改正案に関する論争があり、この論争は国民の関心事であった。争点は内地雑居であった。内地雑居は外国人の居住、旅行、営業などを居留地に制限しないことを意味する。政府の不平等条約改正の焦点は関税率の調整にあったため、内地雑居の問題は許容の方向へと傾いていた。しかし民間では居住の制限がなければ外国人により経済的支配を受けるという危機感が強かった。それで政府案と反対の「内地雑居尚早論」が影響力を持った。徳富蘇峰は条約の互惠的精神や日本の歴史的経験から内地雑居は日本人の自尊心を脅かすことにはならず日本社会の発展にも有利だと考えた²⁸。

ここで徳富蘇峰は日本が進むべき道に対する自分の今までの考えを点検しはじめたようである。初版『吉田松陰』の序文は「第5帝国議会開会の日」、つまり1893年11月28日に書いたものと明記されている。『吉田松陰』と名付けているが、松陰を中心とした戦後の大勢、「暗潜黙移」（暗闇に閉じ込められた中で声なく流れていく：訳者注）の現象を観察したものに過ぎない。もし、内容上名実が互いに合致しないのならば「維新革命前史論」

26 米原謙前掲書 98頁。

27 同上書 98～101頁。

28 同上書 93～98頁。

としても不可能ではないとした。予算と条約問題をめぐる今までの議会（政党）状況を突破する道は何かを、吉田松陰の時代をふり返って、もう一度省察してみようとしたのである。結論的には徳富蘇峰はここで民権運動、つまり政党に対する期待を失い、吉田松陰が主張したように天皇中心の国家主義を優先すべきだと判断するようになったと思われる。条約改正問題を通じて「国家的自主」が平民社会において強く意識されたことを考えて、平民主義の民権運動を持續させるよりは対外進出の国民膨張が今日の日本を発展させるのに、より容易で必要なことだと判断したのである。これが「連載」と初版『吉田松陰』の間に目次の大幅な修正をもたらしたのである。（〈表1〉参照）

〈表1〉 徳富蘇峰の初版『吉田松陰』の目次由来一覧

講演筆記 (1891. 春)	『国民之友』連載 (1892.5～9)	初版本『吉田松陰』(1893.12)
1. 松陰神社	1. 一寸の蛇	1. 誰ぞ吉田松陰とは
2. 松陰と師友	2. 旅行	2. 家庭の児
3. 脱藩して旅行	3. 攘夷	3. 徳川制度
4. 踏海遠遊の計企	4. 尊王	4. 鎖国的政策
5. 松陰の国防意見	5. 松下村塾	5. 天保時代
6. 松下義塾の教育法	6. 打撃的運動	6. 水野越前守の改革
7. 外の交は内の憂	7. 革命家	7. 長防二州
8. 松陰と攘夷	8. 最後	8. 旅行
9. 19世紀の蘇秦張儀	9. 松陰とマヂニー	9. 象山と松陰
10. 局面打破の急先鋒	10. 結論	10. 攘夷
11. 革命家の資格		11. 尊王
12. 松陰とマヂニー		12. 幕政の変局
13. 松陰の最後		13. 松下村塾
		14. 打撃的運動
		15. 革命家としての松陰
		16. 最後
		17. 松陰とマヂニー
		18. 家庭に於ける松陰
		19. 人物
		20. 事業と教訓

徳富蘇峰が初版の序文を書いた日から開かれた第5議会（1893年11月28日～12月30日）の議事進行は少しも好転しなかった。政党の人事のうち民間の危懼心を意識して政府案を反対するための方案を別に準備した人たちもいた。硬六派と呼ばれるこの勢力はすでに住居の制限を規定した現行条約がしっかりと施行されていない点に着眼し、これをこのまま施行せよという「現行条約勵行建議案」を上程した²⁹。第5議会では、このように条約改正問題をめぐって政党内で意見の異なる流れが生じる状況に直面した。今までの民党対吏党の構造が崩壊していた。政府と議会は最終的に解決の糸口を見出せないまま第5議会はその年の12月30日に解散した。

1894年に入り3月1日に第3回総選挙が実施され、5月15日に第6議会が開かれた。議会は内閣弾劾案を可決したが、宮内省はこれを採択しないという意向を議会に伝達し、6月2日に「朝鮮出兵」の決定を下し、もう一度議会は解散した。徳富蘇峰が初版『吉田松陰』を刊行して下した判断に間違いはなかった。1893年1月に書いた「大たる日本」の趣旨は以後も表明され、第6議会が開かれた時期、すなわち日清戦争の勃発直前には『自主的外交』（1894年5月）を出して所信を表明するに至った³⁰。

初版本『吉田松陰』は、<表1>でも見たように『国民之友』に連載されたものに比べて項目が10個から20個に増えている。1、2節で吉田松陰の家系と幼少期の教育を扱い、3節から7節まで明治維新前の幕府改革の意志と能力の不在、それに比べて外交的「屈辱」をなくそうとする長州藩（長門国、周防国）の武士たちの動向が5つの節にわたって書かれているのは吉田松陰の業績を幕末維新期の歴史の中から見出す意図によるものであった。大義としての「尊王」（10節）「攘夷」（11節）に続いて「幕政の変局」（12節）を挿入したのもその業績の推移を描くためであった。この歴史的な大転換を引き起こした人材を養成した過程を「松下村塾」（13節）で扱った後、「打撃的運動」（14節）にでた吉田松陰を「小マッツィーニ」³¹とみなしたのは「連載」時と同じである。ただし「連載」で節の名を「革命家」としたのを「革命家としての松陰」という修飾的表現へと変更した。中盤で「家庭に於ける松陰」（18節）「人物」（19節）「事業と教訓」（20節）などの節をたて、人物に対する評価を上げたのは、彼を「日本男児の好標本」と規定し、国民の師匠とし「新日本」の「国民的膨張」の原動力にしようとしたからである。こうした観点から見ると、初版本『吉田松陰』で革命家としての松陰が強調された点を重視し、民権運動の「第2維新」を達成するための発刊であるという評価は首肯しがたい³²。日本人の「国民」として進むべき道に対する期待としての民権運動的效果も一面としては堅持しているが、本質は「大たる日本」の形成に寄与できる歴史的な手本になるような人物を探すがその叙述の意図であったと考えられる。「連載」以後、前述したような1892年後半から1893年にいたる時期の政局の新しい流れがこうした積極的な解釈を可能にする。第20節の「事業と教訓」の句節が徳富蘇峰のそうした叙述の意図を如実に示している。

29 米原前掲書 94 頁。

30 同上書 99 頁。

31 「小マッツィーニ」は徳富蘇峰の表現である。岩波文庫『吉田松陰』（1981年）217 頁。

然れども彼の事業は短けれども、彼の教訓は長し。為す所は多からざるも、教うる所は大なり。維新革命の健兒としての彼の事業は、あるいは歴史の片影に埋もるべし。然れども、革新者の模範として、日本男兒の典型として、長く国民の心を燃すべし。彼の生涯は血ある国民的詩歌なり。(中略) 即ち松陰死すもなお、死せざるなり。彼が殉難者としての血を濺ぎしより 30 余年、維新の大業半ば荒廢し、さらに第二の維新を要する時節迫りぬ。第二の吉田松陰を要とする時節は来りぬ。彼の孤墳は、今既に動きつつあるを見ずや。

徳富蘇峰は 1893 年の時点で明治維新が元来目標としたものはきちんと成し遂げられていないと評価し、その半分を新たに達成するために第二の吉田松陰が必要だとした。「成し遂げられていない半分」すなわち第二の吉田松陰が成さなければならない残された課題とは限界にぶつかった平民主義の民権運動ではなく、日本人を国民的膨張の主体として養い、東洋の「大たる日本」を形成することにあった。それはまさに吉田松陰が「幽囚録」で日本人が今後生き残る道、すなわち対外膨張論として後世に残したものである。「屈辱」の予防のための果敢な「打撃的運動」を吉田松陰から学ばなければならないというのが『吉田松陰』を刊行した目的であったのである。

蘇峰は初版の序文で「事実の骨子は大体「幽室文稿」『吉田松陰伝』(1891年、史料集)から得た」としている。1891年水戸の歴史編纂者と長州吉田松陰の弟子たちの藩閥勢力、後孫の間に形成された吉田松陰顕彰意識、およびその成果が徳富蘇峰自身に浸透しているのである。ともあれこの刊行は徳富蘇峰がすでに「ナショナリズム」の道に立っていることを示している³³。

3) 日清戦争と徳富蘇峰の戦争弘報

徳富蘇峰は 1893 年 12 月の初版本『吉田松陰』を刊行した後、何篇かの論説を通じて戦争を通じて成し遂げられるべき領土拡張の正当性を論じた。領土拡張と植民地獲得は不平等条約で傷ついた名誉を回復するものであり、国民的自尊心を見出すものであるとした³⁴。国家の膨張は個人の活動によって行われるもので個人の膨張の結果が国家の膨張で

32 前掲の岩波文庫収録「付録 吉田松陰演説草稿」、植手通有「解説」272～273頁、および田中彰前掲書 33頁。植手通有は前掲書の解説で「国民的膨張」への「変調の萌」が同時にあらわれる点を指摘しているが、改訂版と比べると違いがあったとした(273～274頁)。植手通有は岩波文庫出版で初版本が改訂版(1908)よりも蘇峰の思想の形としてより重要であるといい、また改訂版に対して蘇峰自身も戦後に不満を示しているので初版本を選んだとしている(「解説」275～276頁)。このような観点は、初版本ですでにあらわれる膨張主義を過小評価したものと思われる。しかし、膨張主義が日清戦争当時、強い扇動性を有した事実を直視すれば、初版本にみられる「国民的膨張」の性向は決して過小評価されるものではない。

33 米原謙前掲書 101頁。

34 同上書 116～121頁。

あるとした。これは伊藤博文や山県有朋がヨーロッパを訪問し、教えを受けたシュタインの国家論に該当するものでもある。国民個人は潜在的兵士であり、国家の名誉と威信を拡充するのは個々の国民に課せられた義務であるとした。福沢諭吉が清国との戦争を文明と野蛮の戦争と表現したのはよく知られている。つまり他者すなわち西洋列強の目を意識して西歐化した日本がまだ野蛮な状態にある清国、その影響下の朝鮮を文明世界へ導くための戦争がまさにこの戦争であるとして正当化しようとした。この戦争の勝利は西欧から文明国の地位を認めてもらう機会でもあった。内村鑑三は「日清戦争の義」という文章で、この戦争は日本を野蛮視する西洋列強の偏見を払拭できる契機であると意味付け、清国に勝つことは同時に世界に対しても勝つことだとした。欧米に対する雪辱と名誉回復を目標にしたのである³⁵。徳富蘇峰は内村鑑三の英文版の文章を『国民之友』に転載した。内村は「シナ（中国）は社交律の破壊者なり、仁情の害敵なり、野蛮主義の保護者なり」とまで指摘している³⁶。蘇峰はこれをもとに朝鮮を改革し清国を討伐することは「文明の権利」と主張した。

徳富蘇峰は戦争の直前に吉田松陰の文章をすべて検討していたので、自然に彼の言説からも戦争正当化の論理を求めようとした。蘇峰はこの戦争を一言で「日本帝国統一自衛の道を尽くし外に膨張せしむるなり」とした。松陰の『幽囚録』の論調をそのまま感じさせる表現である。「征清の真意義」では、「自衛と雄飛とは維新大精神を胡桃殻中に箝めたる核心の要語也。」（『国民新聞』1894年12月）とし、ついで尊皇攘夷（明治維新）－自由民権－国民的膨張（日清戦争）へと、維新と日清戦争を同一線上に位置付け、「膨張とは他邦を侵略するの謂ひにあらず、日本国民が世界に雄飛し、世界へ向て大義を布くにあるのみ」といい、戦争を正当化した。（『国民之友』第263号の「日本の活題目」1895年9月23日）³⁷

日清戦争勃発前後の徳富蘇峰の論説は当時藩閥政府の核心にあたる人物の発言と同じであった。内閣総理大臣としてこの戦争遂行の中心にいた伊藤博文はいうまでもなく、軍部派の代表である山県有朋は「教育勅語」のイデオロギーとして「忠孝」の「忠」は、戦争で「義勇奉公」として顕現するものであると明示している。そして彼は内閣総理大臣（1889年12月～1891年5月）の資格で、1890年の第1回帝国議会において「主権線」（国境）のみならず「利益線」（朝鮮）確保の施政方針を発表したことがある。これは総理大臣になる前に行った2度目のヨーロッパ訪問の際にドイツのローレンツ・フォン・シュタイン（Lorenz von Stein 1815～1890年）から学んだ外交論であった³⁸。藩閥勢力の中心にあらわれている外向構想の言説を見ると、徳富蘇峰の「大たる日本」（1893年1月）は長州藩閥の核心人物たちの「大国主義」をそのまま受け入れたも同然である³⁹。

徳富蘇峰は戦争が起きると取材の名分で長州出身の軍人、官僚たちに近づいた。明治政

35 同上書 120～121頁。

36 前掲書 122頁。内村鑑三は後に自分の文章を反省し、謝罪している。

37 田中彰前掲書 36～37頁。

38 伊藤之雄『山県有朋－愚直な権力者の生涯』（文春新書、2009年）233頁。

39 米原謙前掲書 128頁。

府は天皇を大元帥とする大本営を設置し、開戦と同時にその位置を東京から広島へと移し、天皇の出陣の形式を整えた。現役の軍人としては川上操六が大本営参謀次長として最高位に任命されている。川上操六は薩摩藩出身で西南戦争のときから長州藩出身とともに国民軍創設、発展に功が多く、日清戦争当時には長州出身の山県有朋よりも序列が上であった。徳富蘇峰は彼とは以前から親交が深く、彼から戦争取材の便宜を受けた。広島に『国民新聞』の臨時支局を設置し、取材競争で優位を確保した。はじめての天皇の広島出陣の際には彼は参謀次長の取り計らいで従者の名目で同じ列車に便乗する便宜を受けている。翌年4月まで広島を根拠地に東京との間を7回往復しつつ取材を行った。その間川上参謀次長以外にも運輸通信長官寺内正毅（後の韓国統監、初代朝鮮総督）、樺山資紀（薩摩出身海軍大将、1895年初代台湾総督）、山本権兵衛（海軍大臣副官、1898年以後海軍大臣として日露戦争時海軍出陣命令、1913年内閣総理大臣）などを度々訪問し、情報を得ていた⁴⁰。1895年5月戦勝を目前にして遼東半島を訪問した際に会った師団長桂太郎とは1900年から深い政治的関係を形成し、日露戦争のうち取材の時にはどんな新聞よりも優位になった。蘇峰の『国民新聞』は戦争に関する報道のうちもっとも扇動的であった。日清戦争の勝利は日本の膨張であり、『国民新聞』の膨張であった。発行部数が発刊当初の場合7千部であったのが、戦争中には2万部を突破した。

5. 徳富蘇峰の帝国主義への転向と改訂版『吉田松陰』（1908年）

1) 三国干渉の「屈辱」と徳富蘇峰

清国との戦争で日本は勝利した。下関講和条約を通じて日本は戦勝国として台湾と遼東半島を獲得した。吉田松陰が『幽囚録』で明らかにした天皇制国家日本が海外で成すべき課題がはじめて実現された瞬間だった。しかし、すぐに遼東半島の割譲に対し3国（ロシア、ドイツ、フランス）の「干渉」が入った。内閣総理大臣伊藤博文はこれを即刻受け入れ「遼東放棄」の措置を下した。軍部は強く反発した。徳富蘇峰はこの消息を遼東の視察中に聞いた。大総督府が企画された遼東視察へ参加し、桂太郎が師団長として駐屯している蓋平（現蓋州市）に滞在しているときであった。彼はこの措置へ憤怒し、現地の小さい石をハンカチに包んで持ち帰った⁴¹。彼にとって伊藤博文とは一番遠く離れた長州出身の政治家であった。反面、この時に出会った桂とは1900年以後ロシアに対する復讐の意を同じくし、互いに深く助け合うようになる。桂は、陸軍創設を主導し、いわゆる長州軍閥の核心として「山県系官僚派」を形成した山県有朋の腹心であった。

40 植手通有編『徳富蘇峰集』（『明治文学全集』第34巻、筑摩書房、1974年4月）付録「年譜」。徳富蘇峰の経歴に関する叙述のうち、この年譜を基にしたものは多いが、以下では一々根拠を提示しない。川上は桂太郎、児玉源太郎などとともに「明治陸軍の三羽鳥」と呼ばれた。しかし1899年に死亡しているので日露戦争とは関係なく、歴史的にもあまり知られていない人物である。

41 米原謙前掲書128頁。

三国干渉は予期しない屈辱であった。徳富蘇峰はこれについて「戦争によりて一夜のうちに巨人となりし国民は平和談判のために一夜に侏儒となれり」と表現した。彼は臥薪嘗膽を唱えロシアに対する復讐の論理を作り上げた。日清戦争では野蛮を撲滅するための文明の権利で戦争を正当化したが、ロシアは「文明」の地位で日本より優位にあったため、新しい論理を考え出す必要があった。彼は日本に対する「世界の同情」に訴え、日本国民を「世界の人情を活現する国民」として美化しつつ、「天下を同胞とする気概」を持つ日本民族は「一視同仁」で周辺国家に対する施政の機会を持つと領土の拡張にあたっているとした。三国干渉を受諾して約4ヶ月後に徳富蘇峰が到達した戦略であった。彼は「世界は独り国民の世界にあらず、人間の世界なり。国家の生存は大なる要求なり。しかし、人情はこれよりもさらに大なる要求なり。(中略)吾人が今日において為すべき大計は日本帝国をして人情と文明の防衛者たらしむるにあり」とした。ロシアを「無道の強国」と規定し、日本をこの強国に挑戦する「進歩」と「文明」と「人情」の国とし、日本は朝鮮独立という大義の実現をすでに世界に公言し、その使命は放棄できるものではないとした⁴²。

2) 「政治家」徳富蘇峰と『国民新聞』の政府機関紙化

徳富蘇峰は1896年5月～1897年6月までの13ヶ月間ヨーロッパ全域とアメリカを旅行した⁴³。同志社英学校の後輩で『国民新聞』で勤務中であった深井英五が同行した。民権運動の時から縁を結んだ大隈重信の紹介で銀行から6千300円余りを借りて旅行費にあてた⁴⁴。彼は1896年9月に旅行中に松隈内閣(首相松方正義、外相大隈重信)の成立を聞いた。旅行中にロシアに対する雪辱を果たすためには英国と提携する必要性を感じ、「日英同盟の構想」を大隈に伝えた。伊藤博文や山県はこのときロシアとの協商を重視したために蘇峰は彼らとは距離を置いていた。大隈が外務大臣になった状況で自分の意見を政策として実現させようとしたのである⁴⁵。

徳富蘇峰は帰国直後、松方正義と大隈外相と会った。そして1897年8月に新設された内務省勅任参事官に就任した。蘇峰は帰国直後、彼らとの面談で『国民新聞』の役割について事前に約束し、ついで勅任参事官に就任するようになったという。彼は『国民新聞』

42 米原謙前掲書130～131頁。

43 米原謙132～140頁。5月21日横浜を出発し、香港、スエズ運河を經由し、マルセイユ、ロンドン、アムステルダム、ベルリン、ワルシャワ、サンクトペテルブルク、モスクワ、キエフ、オデッサ、コンスタンチノーブル、ブカレスト、ブダペスト、ウィーン、ベニス、フィレンチェ、ローマ、ナポリ、ジュネーブ、リヨン、パリ、ロンドン、ニューヨーク、ボストン、シカゴ、サンフランシスコを巡歴した。

44 同上書133頁。当時『国民新聞』社員の1ヶ月の月給の平均が10円であったという。深井は1901年松方正義の推薦で日本銀行に入社し、1935年に13代総裁となる。1904年2月、日露戦争が起きてから、1907年5月まで何度も出国して副総裁(高橋是清)の外債募集のための出張に同行した。

45 前掲書140頁。

を松隈内閣の「正統なる唯一機関」とするという覚書に署名し、内閣の主要メンバーに交付した。覚書は『国民新聞』は「日本国民に対しては現内閣を代表し、世界に向かっては大日本帝国を代表する」と規定し、これに加えて政府から資金と情報提供を受けて他の新聞を操縦する役割が明記された⁴⁶。これはつまり完全な政府機関紙化を意味するものである。藩閥批判の民党合党論を社是としたときからわずか5年しか過ぎていなかった。「変節」に対する非難の声が高く『国民新聞』は発行部数が25000部から5～6000部へと急激に減少した。

松方内閣は短命であった(1896年9月～1898年1月)。地租増徴と軍備拡張の問題をめぐって松方派と大隈派が対立し、支持政党であった進歩党が松方内閣との断絶を宣言したため内閣総辞職を引き起こした。その後第3次伊藤博文内閣が結成された。『国民新聞』は御用新聞になり人気は凋落し経営危機に陥ったが、方向転換もかなわなかった。1898年1月蘇峰は総理大臣伊藤と官邸で会い、地租増徴と軍備拡張に対する意見の一致と協力を約束した。しかしこの時期の内閣は短命政権が続いた⁴⁷。政治に足を踏み入れた蘇峰はこうした状況で様々な政治家を探ししかなかった。彼は「予の位置は伊藤派でもなく、山県派でもなく、……一個の愛国狂者」と自ら弁じている。1898年5月発行部数の減少で『国民之友』『家庭雑誌』『極東』の3誌が閉刊になり『国民新聞』ひとつにまとめた。蘇峰は故郷の熊本で衆議院に立候補する考えを持つほど政治に傾倒していた。これは、「三国干渉」の雪辱という国家目標の達成が言論人としての自分の使命であると信じつつ「政治ジャーナリストが政治家の走狗」へ変化していく過程であった⁴⁸。

1901年6月第1次桂太郎内閣が成立した。桂内閣は以後1906年1月まで5年近く存続した。桂内閣は日露戦争を起こし勝利した。徳富蘇峰にとってこの戦争は臥薪嘗胆を経験させられたロシアに対する雪辱の機会であった。桂は伊藤博文とは違いロシアとの協商ではなく対決を主張し、遼東半島を日本が取り戻す政策を行うのにより積極的であった。桂は政権をとると、すぐに英国との同盟を推進し、1902年1月に日英同盟を成立させた。徳富蘇峰はまだ桂と親密な関係ではなかったが、桂が首相になった後、桂からの要請を松方が仲介して会見の場を持った。蘇峰は外から桂内閣を援助することを約束した。以後特に日英同盟により2人の関係は密になり、急進展した。徳富蘇峰がみずから表現したように、これを契機に「身も魂もほとんど桂内閣といわんよりも桂首相と一致」した状態になった。1913年に桂が死ぬ時までの10年間、蘇峰は「ほとんど私が持ちうるすべてのもの」を桂中心の現実政治に注ぐ事態へ発展した⁴⁹。こうした桂との密着は、韓国の保護国化、統監府設置を通じた植民地体制の確立に彼が直接関与したことを意味している。

徳富蘇峰は桂首相と一心同体になり、『国民日報』はすぐ政府の意見を代弁する役割を

46 前掲書 141頁。

47 第3次伊藤博文内閣(1898年1月～1898年6月)、第1次大隈重信内閣(1898年6月～1898年11月)、第2次山県有朋内閣(1898年11月～1900年10月)、第4次伊藤博文内閣(1900年10月～1901年6月)へと続いた。

48 米原謙前掲書 144頁。

49 同上書 152～153頁。

担った。桂首相は蘇峰に言論人として国民を率いて挙国一致の実を収め、第3国に対して日本の立場を説明して理解を得て、外国の外交官や特派記者を操縦するなどの任務を委嘱し、国論の統一と国際世論の活用に尽力することになった。『国民日報』は政府の内部情報網を利用しつつ、この役割を遂行した⁵⁰。日露戦争は日本が韓国を押さえ、ひいては満州、遼東半島をロシアから奪い、満州支配の基盤とすることを目標にしていた⁵¹。こうした野望の下で軍事的経済的に韓国の保全は日本の生存に関係し、ロシアがその国民的生存権を侵害する以上、国民は奮起するしかないと言われ、国民たちを扇動した。欧米の言論を相手にした宣伝では韓国人が日本の保護国になることを歓迎していると歪曲したりもした。

3) 改訂版『吉田松陰』の刊行（1908年）

初版の『吉田松陰』は1908年まで13版を重ねた。14年間近くで13版であれば、ほぼ毎年1度ずつ印刷したことになるためベストセラーともいえるだろう。なぜ改訂版を出したのであろうか。1904年2月から始まった日露戦争の勝利、これを契機とした日本帝国の国際的地位の上昇と関連があることは想像に難くない。ロシアとの戦争で日本が勝利したことに世界が驚いたのは事実である。改訂版は〈例言〉（1908年9月24日）で序文に代えた。ここで明らかにされた改訂版を出した事情は次のとおりである。

まずこの本は「修繕」というよりも「新築」に近い「大修繕」であるとし、内容を大きく変えたことをみずから明らかにしている。この点は初版と改訂版の目次を比較した〈表2〉をみても確認できる。〈例言〉は1年前から改訂作業を考えていたが、この年5月に乃木（希典）大將軍の「凱切な懲憊」を受け、また、松陰門下の野村靖子爵⁵²が旧著書（初版）に対する「最も厳密、精細なる批評」を下し、そして何度かの「垂示」を与えたことに刺激を受け、改訂するに至ったという。そして松陰の相続人である吉田庫三⁵³が家宝を含む豊富な資料を提供し、桂太郎、寺内正毅、柴田家門⁵⁴もまた資料を提供してくれたと明らかにしている。初版を出した後、「政治家」への転身時に深く関与した桂太郎、寺内正毅などから資料の提供を受けたという点は注目される。これは改訂版が政治的寄与に大きな比重を置いていたという傍証である。そして文学博士井上哲次郎、文学博士大槻文彦、村田峯次郎など学界の人物を挙げたことは初版本には見られなかったことである。3人は著者自身の質問に対して誨示を惜しまずに謝意を示したという。このうち哲学者井上哲次郎は皇国主義の創出に深く関係した人物である⁵⁵。

〈表2〉でもわかるように改訂版は初版とは違い、緒論と結論を様々な節に入れている。緒論は4つの節、結論は10個の節で構成されている。そして初版の(8)旅行を4個の節(鎮西旅行、亡命、東西上下、踏海の失敗)で分化、増補している。反面初版の(17)松陰とマッ

50 同上書 154頁。

51 和田春樹『日露戦争』（岩波書店、2010年）第10章「日露戦争はこうして起こった」参照。

52 野村靖は第2次伊藤博文内閣で内務大臣、第2次松方正義内閣で逓信大臣を歴任し、1909年に死去した。遺言により吉田松陰の墓域に埋葬された。

53 吉田松陰の甥（姉妹の子息）として相続者となり、おもに教育界に従事した。

54 第2次桂内閣で官房長官を歴任し、後に文部大臣になった。

<表 2> 徳富蘇峰の『吉田松陰』での増補改訂版目次比較

初版『吉田松陰』(1893. 12)	改訂版『吉田松陰』(1908. 10)
緒言	例言
	緒論 一～四
1. 誰ぞ吉田松陰とは	左同
2. 家庭の児	左同
3. 徳川制度	左同
4. 鎖国的政策	左同
5. 天保時代	左同
6. 水野越前守の改革	左同
7. 長防二州	左同
	修養時代(2～7部分継承関係)
8. 旅行	鎮西旅行
	亡命
	東西上下
	踏海の失敗
9. 象山と松陰	左同
10. 攘夷	左同
11. 尊王	左同
12. 幕政の変局	左同
13. 松下村塾	左同
14. 打撃的運動	左同
15. 革命家としての松陰	削除
16. 最後	左同
17. 松陰とマヂニー	松陰と国体論
	松陰と帝国主義
	松陰と武士道
	交友での松陰
	書生としての松陰(19部分反映)
18. 家庭における松陰	左同
19. 人物	画竜点睛(15, 19部分反映)
20. 事業と教訓	削除
	結論 一～十

ツィーニは5個の節が増えてマッツィーニは目次からなくなり、代わりに「松陰と国体論」「松陰と帝国主義」「松陰と武士道」「交友における松陰」「書生としての松陰」などが入った。改訂に着手した根本的な動機として〈例言〉で明らかにした乃木大將軍と野村子爵の「批評」は、この部分を対象にしたものではないかと思われる。イタリアの英雄を借りて吉田松陰を「小さいマッツィーニ」と表現したことに対する不満が大きかったのだろう。マッツィーニは蘇峰自身が民権運動の次で注目した人物であったため、これを「批評」によって削除したとしたならば、大きな変化とみなせるであろう。改訂版が極度の皇室中心主義を志向した点からこの推定を傍証しうる。4個の節にわたる〈緒論〉で明らかにした改訂の趣旨と方向を整理すると次のようである。

〈緒論 一〉；国家と国民の関係を論じている。すなわち、国家生存の問題は国民の祖国に対する愛・敬・信にかかっているところである。ところで、その程度に関しては、祖国のためには財産生命およびこれに付属する一切の私物をすべて国家にささげるといふ強い精神がなくてはならない。こうした精神があれば国家は生存し、なくなれば衰退、滅亡するとした。このように国家に対する一方的な献身が強調される理由に「今世界の大勢は、内に人種的統一を為し、外に国民的膨張を期す」からであるとした。世界は1つの競場であり、列強はその競走者であり、競走の目的は世界それ自体、誰がより多くの土地を持つのかということである。個人が国家の温情のもとで保護されるのならば国家に対するこうした精神的武装は必須であるとした。

〈緒論 二〉；東西が出会って以来、今まで白色人種優位の認識により異人種は支配され、白色人種は支配するのがまるで先天的な約束のように断定的であったが、日本の興隆がこの断定の誤謬を直すようになった点を強調した。日本が40年かけて世界の舞台にて欧米列強と対等な地位に上がった経緯を明らかにし、世界が驚嘆するこの歴史は挙国一致、君国のために身を捧げる精神で成し遂げられ、世界は実に愛国的精神の権化を日本の国民に見出したと自負した。世界の歴史に偉大な印象を残したこの大きな役事は明治天皇とその臣民の力によるものであるが、一方では、維新改革の大業を成した多くの先進者の功徳を忘れてはいけないとした。

〈緒論 三〉；日露戦争で世界列強の隊列に並んだ日本をみずから帝国主義と規定

55 井上哲次郎は西洋哲学の総合化に注力したが、天皇の意志と権威に服従を要求する「教育勅語」が発表された際、これを支持する「帝室と宗教の関係」を発表し、世論に大きな影響を与えた。彼はその文章で、キリスト教を攻撃しつつ、日本の独特な伝統を維持しようと主張した。大槻文彦は日本最初の近代的国語辞典である『言海』の編纂者として教育勅語が発布された際、文法の誤謬を指摘した人物として有名になった。1891年『言海』の出版記念会の際には、伊藤博文をはじめとする多くの名士が参加した。徳富蘇峰が『吉田松陰』を改訂し、2人に質問をわざわざ送ったのは、それぞれの専門性を借りて本の権威を高める意図があったのであろう。村田峯次郎は長州出身の歴史家として長州藩の藩主毛利家にはいり、長州藩史編修を主宰した経歴をもち、大正年間には維新史料編纂会にも関与した。蘇峰が吉田松陰の伝記を書くには、当然協力を仰ぐべき人である。『朝日本歴史人物事典』（朝日新聞社、1994年）参照。

する内容である。蘇峰は帝国主義の名前は新しいものでも、その実態は昔からあり、日本古代の皇室の歴史、皇祖、皇宗の上代にあったとしつつ「祈年祭祀詞」の引用までしている。日本帝国は家族的国家構成で皇室は大和民族の本幹であり、我々大和民族はその枝葉であり、日本国家はこの家族が膨張していくものとした。また、天皇は日本国民の元首であり、大和民族の家長であるとした。こうした歴史的事実に照らし皇室中心主義は理論から演繹した事実ではなく、事実から帰納した理論だと評価した。愛国心は国史から、国史は皇室から求められるものであるので、皇室を中心にして大和民族の活動、発達、膨張を求める根本的見解を確立する必要があるとした。

<緒論四>；自分の著書『吉田松陰』を上のような皇室中心主義につなげる内容である。冒頭に「大人」を論じ、大人は国家の特定の代表者を意味するもので大和民族が何かを説明しようとするれば、時代の代表的人物を挙げるのがわかりやすく、大人が大人である理由を国民に分からせれば国民的自負が生まれ、国民個人に英雄的心事を高潮させることができるとした。日本の国史でもっとも重要な部分では神武天皇の開国史、次に維新改革史を扱わなければならないというのが自身の見解であるとし、この維新改革の先鋒である吉田松陰、橋本景岳⁵⁶などは、尊王愛国の碧血が断頭場に流れて50年を経過した今でも自分は彼らについて話すことで今日の新時代の新要求に応じようとした。松陰は日本の男児として多くの点で代表的人物であると信じられ、同時に多くの点で維新改革時代の代表的人物として認められているとする。

10個の節にわたる<結論>は、<緒論>の皇室中心主義を繰り返すような内容が多い。特に注意を引いたのは「死」をも辞さないとする献身を繰り返し強調する点である。

<結論一>で吉田松陰は改革者の模範として、日本男児の典型として、長い間国民の心を燃やすことのできる彼の生涯は血のかような国民的詩歌として、「松陰死すもなお、死せざるなり」とした。初版の結論部分の表現をそのまま写したものである。<結論四>では、天皇の絶対性を感想的に表現した。すなわち「尊王心の向かうところは火の原を燎くようである」とし、「天皇の下、幕府もなし、諸藩なし。唯日本帝国あるのみ。天皇の下、將軍なし、諸侯なし。武士も平民もなし、唯日本国民あるのみ。」とし、天皇と国民を1つの線上に直結させ、天皇に対する国民の忠誠心を刺激した。続いて<結論五>で「彼等(松陰など)はたんに死のうと思ひ死んだのではない。その目的を達しようとしたために死をも辞すことができなかつたのである。その目的とは何であろうか。王政復古これである。」とした。

<結論七>では「大和民族はけっして世界の競場で第二流に落ちることが許されない」とした後、<結論八>で「こうした確信と希望はどんな場合でも人々を厭世的にさせない。吾人は維新の志士たちから彼らが非常に死を軽んじ、時には死を待つことの大切さを見てきた。<結論九>でもまた「彼らが死生の間にあるという覚悟を前にして死を恐れなかつ

56 1859年の安政の大獄で吉田松陰と同様に斬首の刑を受けた。当時、26歳であったが15歳のときに書いた『啓発録』がある。東京の南千住の回向院に吉田松陰などと一緒に墓がある。

たことは維新志士の典型である」とし、殉国、殉節を何度も賛美した。

最後の〈結論十〉は「個人の献身的精神ではなく日本国民としての献身的精神のみが小国を大国にし、貧国を富国にするのであり、世界で孤独な国を世界でもっとも友邦国が多い国にする」とし、もう一度国のために犠牲を厭わないように促した。天皇への国民の忠愛心の丹誠さを統一、総合することのみが松陰先生と今日共存できるとした。これが「松陰が身を殉じ後人に残す遺訓」であるとした。

改訂版『吉田松陰』は日露戦争の戦勝国として日本が世界列強の隊列に並んだことをみずから称賛しつつ長州藩閥勢力政権の要請により、この時点ですでに形成された皇室中心主義のための教本として新たに編集されたものであった。そしてこの本は1942年に27版を出すほど「日本帝国臣民」に広く読まれた「国民読本」のひとつであった。著者は1909年に書いた序文で本を出してまだ1年にも満たないのに10版を重ね、意外なことに欣快を感じるとしつつ、旧著（初版）13版を合わせれば23版にもなる点を指摘した。1917年第1次世界大戦が続くさなかに書いた序文には多くの欠陥があるにもかかわらず、最近24年間に前後33版を出すことになったのは、ひとえに吉田松陰の人格が、明治、大正の社会において高い推仰を受けていたことを知りうるものであり、それゆえ松陰先生、彼自身が死んでも現時代でも生き生きと感化の光を照らしており、これはどうして取るに足りない著者の栄光ではなからうかと感謝を表明している。つづけて、再び「精霊的松陰」の「君国に命を捧げた大節清操」を称賛した。その後1930年、1933年、1934年の刊行本にも序文を続けて付している⁵⁷。

日本帝国の皇室主義は軍国主義を強化し、1930年代に満州事変（1931年）、日中戦争（1937年）、太平洋戦争（1941年）を続けて引き起こした。徳富蘇峰の筆は戦争の時代に戦意を何度も新たにするように休むことなく動いた。彼は1939年に『昭和国民読本』（東京日日新聞）を出し、1940年には『満洲建国読本』（日本電報通信社）を出した。前者で彼は1919年第1次世界大戦が終わった後に列国は領土割拠の競争を起し、周辺国を陥れる政策を続けていることが世界の現在の趨勢だとし、日本が起こした戦争に肩入れし、「遠征将兵の労苦を考え、銃後同胞の熱性に感動し」、一老兵が戦争で駆けめぐる「馳驅の」気持ちで小さいながらも君国にこたえようとして書くのだとしている。

6. 結び - 反省しない「戦後の清算」

筆者は数年前「韓国近現代史認識の歪曲と錯乱」という文章において韓国の歴史学界が

57 以上はソウル大学中央図書館所蔵の1934年版に掲載された序文などによるものである。

58 この論文は第6次日韓歴史家会議（2006年10月27～28日、東京）で発表したものである。その後、邊英浩訳『都留文科大学研究紀要』第73集（2011年3月）に掲載した。丁日聲前掲書『日本軍国主義のゲッペルス 徳富蘇峰』（知識産業社、2005年）を主に活用し、日本のいくつかの著述を利用した。

徳富蘇峰の存在を知らないか、度外視している状況を指摘した⁵⁸。当時徳富蘇峰に対する韓国内の情報が余りにも少なく、韓国併合の後、彼が植民地言論統制に与えた影響を概率的に考察しつつ、今後彼に関する研究が必要であることを指摘した。吉田松陰の重要性については2010年に「韓国併合」100年を迎えて国際学術会議に提出した「近代日本長州藩閥の韓国侵略—法と倫理の失踪—」⁵⁹で簡単に言及したことがある。今回の論考を通じて2人が近現代日本の韓国侵略史に与えた影響は予想よりも非常に大きなものであったことが理解できる。

吉田松陰は征韓論の元祖にあたる人物であることが再確認できた。時期的に吉田松陰より前の佐藤信淵(1769～1850年)の「宇内混同秘策」が征韓論の戦略、すなわち兵力動員計画を立てたこともあるが⁶⁰、その政治的影響は良く分かっていない。一方吉田松陰は明治維新で主流となった勢力の師匠として、彼らの侵略政策に直接影響を及ぼしている。内容的にもそれは「征韓」を越えて日本の天皇が主宰する新しい東洋大帝国の樹立を目標とする「アジア雄飛論」と呼ぶべき侵略性を内包していた。今回の考察では、吉田松陰は、日本が直面した新しい国際的形勢の把握とこれに対処するための対策の模索において、すべて過敏に反応していたというべき水準で起論していた感じを強く受けざるを得ない。これを明治政府の藩閥勢力が金科玉条と考え、「対韓政策」の基礎にしたということにも驚きを禁じえない。それがさらに平民主義の民権運動に失敗した一人のジャーナリストの「便宜主義的」な変身の道具として利用され、絢爛な筆体で再構成され、日本の全国民が彼により「皇国臣民」に変化していった過程には、憤怒ではなく憐憫を禁じえなかった。

日本の歴史学界で徳富蘇峰に関する研究が多く行われているのはいうまでもない。しかし彼が韓国史に及ぼした悪影響についての研究は少ない。日清戦争、日露戦争が近現代の韓国史に致命傷を与えたものであるならば、徳富蘇峰と彼の『国民新聞』に対する研究は学術的に真摯に取り扱わねばならない。日露戦争の後、いや、改訂版『吉田松陰』を出した後、蘇峰は大韓帝国の言論に対して統監府、総督府の弾圧政策の立案者の役割を果たす。彼は『京城日報』の監督として東京—ソウルを往来しつつ、総督寺内正毅の植民統治政策に大きな影響を与えた。この新聞に載せた彼の文章がどれほど武断政治体制の形成に影響を与えたのかは必ず考察されねばならない対象である⁶¹。彼は『京城日報』から退く1ヶ月前から『近世日本国民史』を連載し始め、敗戦後にも継続して1952年に第100巻目を脱稿した⁶²。この長大な「国民史」は豊臣秀吉が登場してから始まっており、日本国民の歴史認識に及ぼした影響は甚大であった。ジャーナリストとしての独特な史観と筆体で一

59 都時煥他著『韓日強制併合100年の歴史と課題』(東北アジア歴史財団、2013年【韓国語】)収録。日本語版は笹川紀勝・邊英浩監修、都時煥編著『国際共同研究 韓国強制併合100年—歴史と課題』明石書店、2013年8月。

60 韓桂玉『征韓論』の系譜—日本と朝鮮半島の100年—』三一書房、1996年。

61 植手通有が作成した「年譜」によれば、蘇峰が1918年8月、米騒動で後見役の寺内正毅が総理を退き、彼も京城日報の監督から退くようになるが、そのときまで彼が京城、すなわちソウルに滞在した日数は1800日余りである。これは1910年以降、約5年に及ぶ時間をソウルで過ごしたことを意味する。

般の読者層に大きな影響を与えた彼を論じずに、はたして日帝植民地主義の歴史を語ることができるであろうか。

近年日本で「新しい歴史教科書をつくる会」が登場し、日韓両国の歴史問題はより深刻になっている。最近日本の歴史学界でこの会の歴史認識が徳富蘇峰から受けた影響が大きいという指摘が出ている。千葉大学の安田浩教授は徳富蘇峰のナショナリズムの変遷を追跡し、「1990年代以後にあらわれた「ネオナショナリズム」の主張、「新しい歴史教科書をつくる会」や西尾幹二の『国民の歴史』（扶桑社、1999年）などの日本近代史観が少しも「新しい」ものではないこと、すでに当時において「御用記者」呼ばわりをされていた日清戦争以後における体制派言論人、徳富蘇峰の言説の焼き直しであることが明らかになる」と指摘している⁶³。

吉田松陰と徳富蘇峰の膨張主義の歴史観に対する今までの考察で、2013年8月13日安倍晋三日本総理の吉田松陰墓所の参拝にどんな狙いがあるのかが明らかになったものと思う。そして同じ年の12月に安倍総理が就任1周年を迎えて靖国神社を参拝したのは戦前の皇道主義意識に関連していることもわかる。安倍総理の歩みは徳富蘇峰の歴史観に従っているのである。彼が中国との「偶発的戦争の衝突」の可能性をわざと否認しない発言を憚らないのも徳富蘇峰の膨張主義史観からみればそれほどおかしいことではない。徳富蘇峰は1945年12月2日東京裁判で「A級戦犯容疑者」に指名され、1947年9月まで自宅拘禁の懲罰を受けたが、1947年9月に起訴対象からはずれ釈放された。以後、口述で『敗戦学校、国史の鍵』を著し、1948年7月に刊行した⁶⁴。

この本は現日本国民が置かれた状況を敗戦学校1学年に喩え、「日本国民」の狼狽した気持ちが克服されていく道に対する所見を披瀝したものである。これまで自身がデマゴグとして行ってきたことの重さを意識して表示した最小限の誠意として読みえる。ところで内容的には真剣な反省が行われていないように思われる。結論は日本の神国思想を中心にして締めくくられている。歴史的に中国との関係は中国依存で一方的であるが、これを放置すれば日本は精神的に物質的に中国に隷属するしかなく、これに日本人が耐えられないために神国思想が形成されたという。彼はこの神国思想への陶醉が日本の敗亡の結果をもたらしたことを認めながらも、「神国思想の罪というよりは、その思想に対する調節を誤ったためであるというのが適切である」として文章を結んだ。

彼は神国思想の最大のデマゴグとして敗戦の時点においてもその思想を捨てなかった。敗戦前後の日本指導者層のこうした姿勢が、今日の日本の右傾化のもとになっている

62 『徳富蘇峰自書伝』中央公論社、1935年）によると『近世日本国民史』は1935年現在、126版を重ねたとある（497頁）。彼はこれを京城で執筆し、朝鮮総督府の朝鮮人名辞書、朝鮮史の編纂にも意見を開陳し、多々影響を及ぼしたとしている（475頁）。

63 安田浩「日露戦争の歴史的位 置 — 徳富蘇峰のナショナリズムの変遷から —」（安田浩・テオ・ギョングル 趙景達編『戦争の時代と社会 — 日露戦争と現代 —』青木書店、2005年）、22頁。

64 『敗戦学校』徳富蘇峰著、バク・スンネ 朴順来韓国語訳、1950年、創人社。記者の言によれば、原書は前篇（敗戦学校）と後篇（日本歴史の鍵）となっているが、翻訳版では、後篇34項目のうち12項目のみを抜粋して訳すとしている。

ことは誰でも知っている。このように見ると占領国アメリカが徳富蘇峰のような皇室中心主義のデマゴーグたちに「督戦」の精神的犯罪行為をきちんと問いたださなかったのは問題視せざるを得ない。この方面の中心的人物である蘇峰さえ「容疑者」として2年未満の自宅拘禁の処罰で終わってしまったことが果たして妥当なのかどうか、疑問である。東アジア三国の歴史問題の真の解決のために関連学界においてより一層深みのある研究の必要性を痛感する。

Received date : May, 7, 2014

Accepted date : June, 4, 2014